



平野嘉孝（経済学）

継続企業・存続可能性などについて

経済活動の究極的特性は何か、について統一した見解はたぶんない、と思います。ノーベル経済学賞の対象になりやすいのは、主流派経済学とされている分析集団によるもので、彼らの分析枠組みでは、最適化行動の結果が市場の経済均衡を生じさせる、という立場をとっています。しかし、主流派の分析にくみしない分析集団（私もその一人です）も併存して形成されているのが経済学の特徴でもあります。一見すると最適化行動の結果として形成されているように見える経済活動の本質は、繰り返しが可能であること、だと現時点で、私は考えています。最適化行動を凌駕する繰り返し可能性。ただし、繰り返し可能性は、さまざまな次元で設定可能です。

企業レベルでの繰り返し可能性は、継続可能企業（a going concern）概念として会計分野ではよく知られています。とりあえず、ここでは、企業の自己資本（＝純資産＝株主資本）が、企業活動を継続するのに十分な大きさを維持しているか否かに関連している、としておきます。蛇足ながら、この概念の周辺を十分掘り下げるだけで、人生 100 年時代の老後の資金を確保することは、比較的容易である、ことも言い添えておきます。

私が主な研究対象としているのは、企業レベルより集合度合いが強い分業の経済体制下で、経済システムそのものの繰り返し可能性を問題にし、その条件を析出・展開することです。このような分析視角は、ノイマン、レオンチェフ、スラッフア、の 3 人の経済学者によって、1920 年代にそれぞれ異なる分析目的のために、異なる地で独立に生み出されました。ノイマンは経済学者としてよりもコンピュータの開発者としてよく知られている悪魔的な数学力を持った研究者でした。私見では、進化の数理的原則を展開する研究（自己増殖オートマトン）の途中段階で、同じ複雑さ、もしくはより複雑なものを生み出す論理の一例として経済システムの成長モデルを構築した。コンピュータはその研究の副産物と位置付けられるのではないかと考えています。

話を元に戻すと、経済システム全体を考慮に入れた場合、再生産可能条件を満たすことが経済活動を維持するための条件であると考えられてきました。私が主に立脚しているのは、スラッフアの分析枠組みですが、ここ数年、提案し物議を醸している（と感じているのは、おそらく自意識過剰！！）のは、再生産不可能であっても存続可能である条件を取り出せる、という提案です。しかし、数値例はいろいろ作成可能なのですが、再生産不可能だが存続可能な経済システムを定性的に示して見せることには、現時点では成功していません。

同時に、この研究プログラムは、需要と供給に分けて経済活動を描写する伝統的な部分均衡モデルの否定をも意図しているわけですが、この際、数量調整と価格調整の分離も要点をなします。価格は、分業の存続可能性を維持するための交換比率を形成します。他方で、技術進歩が発生する場合、数量の制約性が重要な役割を果たす、というのが最近の論文で主張してみたことでもあります。技術進歩を扱う際には、企業主体ではない分析単位で、企業家精神に相当する役割をいかに表現できるかも含めて、現時点ではあまりにも説得性に欠けている状態なのですが、本人はかなりうれしくなっている面もあります。昨年末にもこの分野の日本の第一人者から、「君は間違っている」というメールが届き、御大を説得するぞ、と気持ちを新たにしていた次第です。